

小川未明の戦争観

—— 第一次世界大戦を中心に ——

大 門 利 佳

はじめに（序章）

小川未明は小説家、童話作家である。日本は第一次世界大戦、第二次世界大戦という二つの大きな戦争に参加していた。小川未明はその二度の大戦どちらとも時代に生き、作品を発表していた。そんな彼が戦争に対してどのような考えを持っていたのかを第一次大戦期の動向、作品を通して論じたい。

本論は、小川未明の第一次世界大戦前後に発表された作品に着目し、彼の戦争観を考察するものである。

第一章 小川未明の戦争観

小川未明が第一次世界大戦終結までに書いた作品から未明の戦争観を考察する。作品は戦争描写があるものを抜き出した。作品の先頭記号◆は小説作品、◇は童話作品を示す。

第二節 初期から第一次世界大戦勃発まで

◆「霰に霽」初出…一九〇五年・新小説

【考察】

「霰に霽」では主人公の「死んだつてかまひはしない」や「僕は日本男子だ。いんまに海軍兵になるんだ。」といった、兵士になりたいという少年のところがあらわれている。さらに、戦争に参加してもし死んだとしても、あこがれの先生に褒められるならば構わないといった、戦争肯定の考えが見える。

◆「日本海」初出…一九〇六年・太陽

【あらすじ】

秋の麗しい日、私は先生の地図の講義を聞いていた。先生から佐渡の島を教えられ、私は、畑で歌う女の歌っている俗謡を思い出した。この青空の彼方に佐渡の島があると空想して、私は涙を眼に浮かべた。

数年後、中学校で私に衝撃を与えたのはウラジオストクでの戦争であった。十六七歳の私はウラジオストクの方向を憤りをもってらんだ。これと比較し、いまこの日本海の海兵で空想にひたっている私には黒い岩が大波に苦闘しているように見え、奮い立つ。ところが次にはこの世界は陸と海との戦争であると感じ、いつかは陸が海に浸食され、敗北で終わるのだと予期する。

【考察】

日本を侵略しようとするロシアに激しい怒りをみせ、自ら戦いに赴こうとする意志を感じる。そして、この世界は陸と海が常に戦争を行っていると思つた。実際の戦争を元に書かれているため、戦争肯定描写が多い。

◆「石火」初出…一九〇七年・読売新聞

【あらすじ】

夏のある日、石工は砥石で刃物を研いでいた。そこに材木を運んでいた男が通りかかり石工に世間話を話しかける。話の内容は主に最近の戦争によつて齎された金回りについてであった。男と別れた石工は夏の蒸れた風の中に大砲の音をきく。

【考察】

戦争＝金回りがよくなることから肯定的な様子が見られる。戦争が終わつて金の動きが変わつてもその恩恵を受けられる人とそうでない人といった身分での差別があつた。

◆「魯鈍な猫」初出…一九二二年・読売新聞

【戦争表現】

この猫は、私が、街から拾つて来たのであつた。木枯に夕陽の色は傷んで、うす黄色に西の空を染めた二月の夕暮方であつた。彼方は、剣を佩げた兵隊の一行が、乾いた途の上に白い煙のやうな塵埃を上げて靴音を立て来た。彼等は、西から来て街の東の方に行かうとした。

素処、此処に子供等の遊んでゐる叫び声が聞えた。赤い、星のやうな軒燈は木枯に磨き澄されて、菓子屋には、青い瓦斯の光が硝子戸を射し透して往來の上を照らしてゐた。此時、隣の足袋屋では、店頭みせまへの戸を閉してしまつた。

この足袋屋の前の途の上に、白い小さな猫がじつとしてゐて動かなくなつた。兵隊の一行は、間近かに足音を立て来かゝつたけれど、猫は驚いて逃げようともしなかつた。

私は、この有様を見て其の猫を追はうとした。すると小猫は、曾て私を見知つてゐた人のやうに、さも懐しげに顔を見上げて啼いた。私は、其の小猫を抱き上げて、衝突しかゝつた兵隊の列から慌て避けた。而して、この誰でも通つて差支へない往來の上を独り、威張つて通る兵隊に面憎く思つた。

若し、私が、救つてやらなかつたら、この小猫は、一直線にしか進むことの出来ない自動機械のやうな兵隊の靴の踵もの下に踏み潰されて、今頃は、血を吐いて路の上に斃れてゐるであらう。而して誰も、この哀れな動物の死について、余り多く悲しむもしないだらうと考へた。

【考察】

兵隊を子猫を避けることもしない心ないものと表現している。「自動機械のやうな」兵士のため、戦争で人を殺すという行為が常習化しているように思われる。猫を助けようとしれない周囲の人も似たやうなものだとしている。

第二節 第一次世界大戦終結まで

◆「路上の一人」初出…一九一五年・新小説

【戦争表現】

もし是等の山河を奪はんとする者があらば其者と戦ひ、守らうといふ心持になつた。而して、戦争といふものを、常に否定すべきは却つて理由のないことであると考へた。

彼はかう思つてゐる時に、ちやうど町の方を走つてゐる号外売りの叫びと、其の鈴の音とを聞き付けた。しばらく感慨を催して来て、二度び清らかに澄み渡つた、静かな空を見遣つた。而して、この空の下、この世界の一角では人間と人間が互ひに血を流して争つてゐることを思つた。其の戦場では凄まじい砲弾の爆発する響きが起

り、煙塵が空を濁し、人馬の死物狂ひの喚声が湧くのである。此処で見得る空には其様な気はひすらない。たゞ太陽は一日平和に此の地上を照らし、やがて平和に地平線に没せんとしてゐる。而して独り今日ばかりでなく、永遠にこの天地は平和であるべきだと、暗黙の裡に語つてゐるばかりのやうに思はれた。少なくとも要一にはさう思はれた。

【考察】

守るべきものがあるならばそれを害するものに対しては、戦うことは悪ではないという考えが見られる。

しかし、一方ではこの世は平和であるべきでも述べており矛盾した考えがある。

◆「戦争」初出…一九一八年・科学と文芸

この作品は題名が「戦争」とあるように戦争に関して細かく未明の思想が現れている。

【あらずじ】

海の彼方で大戦争があるというがそれは本当はつくり話ではないかとみなが思つてゐるのではないだろうか、だから世間は落ち着いて余裕な暮らしをしているのだ。戦争のことは新聞で知るより他がない。今、新聞が“戦争は終わった”と報道したら人々は容易に万歳を唱え、そして死んだ人のことなど忘れ、真理が輝いたと信じるだろう。こんなことは真実に良心のあるものには出来ないことである。一体真理とはどんなものか、戦争という名目でなした殺人だけがどうして正しいのか。私は、今戦争があることが信じられない。

どうして一日に何万人もの人間が殺されていることが実際あることならばここにいる人たちはそれを知って平気で歩いていられるのだろうか。これが私の疑問であった。葉や衣類などが戦争で手に入らないと人々は口し、私はそれによって迷惑を感じるのである。

ある日私は郊外に住むFを訪ね自分が戦争があるとは考えられないことを伝えFの意見を聞いた。Fは戦争はあると答えた。戦争をしているのはここにいる人たちではなく実際に戦って血を流している人間だけに戦争がある、と言った。死ぬのは自分でない、だからこそ平気な顔をしていられるとも答えた。私とFは根本から人間に対する考えが異なっていた。

◆「負傷者」初出…一九一八年・太陽

【あらすじ】

戦争が終わり、片腕を失いながらも幸作は村に帰ってきた。幸作が帰っていたはじめのうちは、名誉ある負傷であると皆から賞賛を受けていたがしばらくたつてからは憐れみと侮蔑の眼で見られるようである。ある日、父親に樺の木を伐れと命じられた幸作は、反発を感じながらも山に入る。活き活きとそびえる樺を見た幸作は天地が平和であることを目の当たりにし、失った腕のことや離縁した妻のことを思い、樺を切ることは罪悪であると感じる。

しかし、再度幸作が妻や子供を失った十年間を思うと、何も知らずに立っている樺に不公平さを感じるようになり、樺を伐ることを決定する。自然に背き、自分の良心を欺こうとする幸作の顔には嘲笑が浮かんでいた。

【考察】

最初の場面で、片腕を失った幸作を見て男たちは「名誉の負傷をしたと、彼を慰めて、其の身に近く取巻いて讚賞した」のに対し、女子供は「さしも怖しいものでも見るやうに敢て近付かな」かったことから男女間で戦争や兵士に対するイメージの差が見て取れる。そして樺の木を伐りに行く場面では「たとひ人間にせよ、木にせよ、勝手に生命を取る権利はない筈だ」と幸作は父親に反発した意見を持ち、戦争のありかたの否定を断言している。そして、生きているものの命を何の理由もなく奪うことは罪であり、もし、理由があったとしてもそれは関係のないものの理由であるため、奪われる側には理由になつてはいないといった、戦争で関係ない人の命を奪うことにも通ずることで幸作は苦しめられる。その後も、幸作は病院で目を覚ました時に戦争の終結を知ったため、自分の中で戦争についての整理が終わっておらずさらには虚無感までも感じているようであり、戦争へ行つた者でさえも意味を見失っていることから、戦争がまったくの意味のないことであると考えられる。

◇「酒倉」初出…一九一八年・読売新聞

【あらすじ】

甲と乙の隣り合った二つの国はよく戦争をしていた。ある時、甲は乙に破られて劣勢に陥つた。そこで甲の国は乙の国がある小さな町を占拠した時に食べ物すべて焼き払い、酒と水だけを残りその中に毒をいれておいた。乙の軍の兵士たちは町を占拠したが食べ物がないため、酒や水を飲み、毒で次々に斃れていった。それを見ていた甲の軍は弱つた乙の軍を破り、軍勢はそれぞれ自分の国に帰つ

ていった。つかの間の平和も直ぐに消え去り二国は再び戦争をはじめた。今度は乙の国が劣勢になり、甲の軍は乙の国を占領しだした。ある日、乙の国の村を占領した甲の軍はその村が以前の自分達の使った作と同じことをしているに気がついた。しかし、その村の草原の中に一人の少年が居ることに軍の大將は気がついた。少年はびつこのため村人に置いて行かれたのである。大將は少年にどの井戸や酒倉に毒が入っているか尋ね、脅し聞き出した。少年は村の三軒の酒倉には毒が入っているが他には入っていないと告げた。それを聞いた大將は兵士に三軒の酒倉の酒を飲み、他には毒が入っているから飲むなど命令した。兵士たちは酒倉の酒を飲み、大將も同じく酒を飲んだ。少年は嘘を言わなかったため、甲の軍の兵士たちは皆死んでしまった。

【戦争表現】

- ・隣合っているところから、よく戦争をいたしました。
- ・乙の軍勢は、どしどし国境を越えて、甲の国に入っていきました。
- ・なにか策略を巡らして、乙の兵隊や、大將どもを殺してしまわなければならぬ
- ・乙の軍勢が、甲のある小さな町を占領した
- ・負けた兵士を勇気づけて逆襲をいたし、さんさんに弱った乙の国の軍勢を破りました。
- ・国境を越えてわが国に逃げ帰り、とうとうこの戦争は甲の勝利に帰して
- ・平和はただちに破れて、また二国は戦争を始めました。
- ・甲の国が勝ちつづけて、その軍勢は、国境を越えて乙の国へ侵入

した

・甲の軍勢は乙の国のある村を占領いたしました。

【考察】

戦争を直接している表現のある童話であるが、少年の言ったことを信用しなかった兵士たちが全員死んでいることから、どちらかというとう人間信用の意味が強いように思われる。

そして、互いの国の侵略を主軸に添えることによって戦争とは相手の領地を奪い合うことであるとしている。

◇「野薔薇」初出…一九二〇年・大正日々新聞

【あらすじ】

大きな国とそれより少し小さな国があった。二つの国の国境には石碑と一株の野薔薇があり大きな国からは老人が小さな国からは青年が派遣されて石碑を守っていた。二人は会話をしながら親交を深めていった。しかし平和だった二国間で戦争が始まった。老人は青年に自分を殺して首を持っていけば青年は出世できると言ったが青年はそれを断り、そして青年は北に去っていき老人だけが残された。ある日、旅人が老人の元を通りかかった。戦争について老人が尋ねると、小さな国が負けて、兵士はみなごろしになり、戦争は終わったと旅人は言った。それから、老人がうとうとといねむりをしていると彼方から一列の軍隊が来るのが見え、指揮をしているのはあの青年であった。老人の前を通る時に青年は黙礼をし薔薇の花をかいた。老人が何かを言おうとする目が覚め、それが夢だったと老人は気がついた。やがて薔薇は枯れ、老人は暇をもらい南に去る。

◆「無産階級者」初出…一九二〇年・中央公論夏期特別号

【考察】

「無産階級者」は日露戦争後の話である。戦争に赴いた兵士は普通に暮らしているものよりも苦痛を知っており、その様子が顔つきや目からわかるようである。

◇「強い大将の話」初出…一九二〇年・読売新聞

【あらすじ】

ある国に戦争にかけては強い大将がいた。どこの国と戦争をしても必ず勝利を収めてきた。ある日、隣の国と戦争をしたが今までにないほど大きな戦争で、大将も兵士を多く失い漸く勝利した。そして都に帰ろうとしたのだが道に迷ってしまい大将は人に聞くことにした。最初は目を泣きはらした年をとった女に尋ねた。自分に道を聞いた男が大将だと知った女は大将の顔をじつと見つめて一本の道を教えた。しかし、大将がその道をたどると戦場に戻ってきてしまった。次に娘に聞いたが、娘が教えた道をたどると新しい墓場についた。元の場所に戻るとそこには一人の老人が歩いていて、老人に今まであったことを大将が話すとき老人は、女は息子を、娘は夫を戦争で亡くしたことを教えてくれた。老人に正しい道を教えてもらった大将は都に帰ってから、死んだ人に同情を寄せて大将の職を辞して、隠居した。

【戦争表現】

・両方の国の兵隊が、たくさん死にました。

・戦争のために荒れはてた、さびしいところ

・森も林も、大砲の火で焼けてしまった

・広い野原に、青草一つ見えないところもあります。

・いつか激戦のあった、思い出してもぞっとするような戦場

・新しい墓場で、今度の戦争で死んだ人のしかばねがうずまわって、土の色も湿っていた

・母親であつて、その子供が戦争にいつて、死んだのを深く悲しんでいる

・結婚して、まだ間もないのであります。それを夫が戦争にいつて、死んだのを深く悲しんでいる

【考察】

戦争で勝利した大将を主人公にし、起こした側の視点で書かれている作品である。しかし、戦争により亡くなったのは兵士だけではなく、まきこまれた一般人も多くいると暗に示している。また、兵士たちにも家族がいて、残された人々の悲しみは大きなものであることも伝えている。

そして、「森も林も、大砲の火で焼け」「広い野原に、青草一つ見えない」様に戦争はしてしまい、自然破壊の一面もあるということを示している。

◆「虚を狙ふ」初出…一九二二年・中央公論夏期特別号

【戦争表現】

「父は戦争に」といふ題が付いてある絵を、私は、「静物」の写真かと思ひました。ちやうど後期印象派の描いた林檎や、梨子には、

こんなやうなのが沢山あるからです。けれど、よく其れを見ると決して静物を描いた絵でなく、子供の写真であつたのです。体が貧弱になつて、石段に腰をかけてゐるので、よく分からなかつたが、頭だけが大きく浮き出してゐたからでありました。ある石造の建物の蔭の処で、裸体の子供が三四人石段に腰をかけて、口を開けて此方を見てゐるのです。眼が力なく、そして穴のやうに大きく落込んでゐました。これでは路の上を歩いて、頭が馬鹿に大きいので、下の部分と釣合が取れなくて、直に躓いて倒れてしまふだらうと思はれました。

(戦争は罪悪だ。何にも其のことに關して知らない子供までが、こんな有様になつてしまふ。)

【考察】

はつきりと戦争は罪悪であると述べている。戦争の犠牲になつた子供たちの姿は二兎を失つた末明によりいつその反戦の意思を持たせたであろう。

戦争表現のある作品を考察してみても、初期の作品は戦争に参加したいという表現などから好意的な様子が見られる。しかし、その後「魯鈍な猫」(一九二二)あたりから反戦的な傾向に変化している。

第三節 「戦争」と「野薔薇」

戦争表現がある作品の中で、作品のタイトルがそのままである「戦争」と、後に反戦童話として有名になつた「野薔薇」に焦点をあてて、考察する。

「戦争」

「戦争」では同じ表現が何度も繰り返されており、主に次のようなことが言われている。

一、一日に五萬人、十萬人という多くの人が殺されている。(表一)
これは、戦争の残酷性を強調させており、さらに“殺される”という表現にすることにより、単にただ人間が死ぬという表現よりも戦争で人が死ぬということは実際は殺人という行為をしているという事実を主張しているのである。

海のかなたで、大戦争があるといふ

海のかなたの遠いこと

眼にこそ見えぬけれど、海のかなたの同じ人間の間に起こりつつある出来事

海のかなたで、同じ運命の下に生活する人間等が血を流してゐること

戦争をしてゐる者は、自分以外の彼等ではありませんか。

戦つて血を流してゐる人間だけに『戦争』があるばかり

死ぬのは彼であつて、自分ではないといふ考へがあるがために、この怖ろしい考へのために、子供を殺し、女を殺し、老人をも殺す

(表1)

二、海の彼方の出来事であり、自分には関係のないことである。(表2)

主人公及び周囲の人間とは関係ないところ(「海の彼方」)で戦争を起こすことよって、客観的な視点での戦争についての考察を可能にしている。また、関係のない事実にする事で戦争をあいまいな行為にしており、戦争によつて死んだ人間への罪悪感の緩和を図っているのではないだろうか。

一日に五萬人も、十萬人も死んだり、殺される

一日に五萬人、十萬人となく非道な殺戮に遇ふ

一日に五萬の人間が一時に殺されたり、十萬の死傷があること

またこの地上に於いて、しかも同じ日の同じ時刻に於いて、手を断たれ、足を落され、胸を抉られ、悲鳴を上げて倒れる者が幾百、幾千、幾萬かある事実

なにを得るために、自己の生命を犠牲にするのだ。しかも、一日に三萬、五萬、一分間に五千、六千、一秒間に五百、千、そんなことがあろう筈がない。

一日に五萬、もしくは十萬の人間が死んだり、殺されるといふこと

一日に五千人、五萬人、十萬人の人々が血を流して倒れ、現に幾百萬の人間が戦つてゐるなどといふこと

(表2)

三、戦争はつくり話であり、本当のことではない。(表3)

これは、日本で暮らしている人々の様子が戦争が起きていない場合と変わらない事実を記していることと同時に、未明の戦争という残酷な行為が本当はないのではないかとという考えが現れているのではないだろうか。

戦争があるなんて、それは作り話ぢやないのかしらん

戦争に死んだと書いてあることは、悉く電報の誤謬であらう

戦争といふことが、真面目な事実として考へられない。

たとへ戦争が作り話であつたにせよ、今は「戦争」といふことが至る所で私の上に崇つてゐることが事実

『戦争』といふもの、作り話にしか過ぎない

作り話を真実にして影も形もない所へ突撃して死んだ

(表3)

四、戦争の影響で外国製品がこない(表4)

戦争はつくり話ではないかと言っていることは反対して、外国からの輸入が少ないことが日本の物資供給を圧迫していることを示している。物が足りないことが、物資の値上がり誘発し、戦争の

自覚がないままに生活を困窮させている。

戦争で、外国品は来ません。

戦争で、薬品が缺乏してゐます。非常に値が上りました。

戦争で高くなつてゐるのですよ。一昨年 of 倍に上つてゐるのですよ。

(表 4)

五、外国の国名 (表 5)

実際の国名が幾度か登場している。内容は主にドイツ軍の虐殺である。これは新聞などで知らされていたことであり、日英同盟に基づいて戦争に参加した日本には敵対するドイツの情報が知らせていたのだと考えられる。

独逸が敵の女子供を両軍の間に密集さして伊太利軍の弾丸避けにしたさうです。

白耳義や、ルマニーや伊太利で、どれほど子供が独逸人の手にかかつて殺されてゐる

ルマニーや、ガリシヤ、白耳義や、伊太利で行はれた子供の虐殺

(表 5)

そして「戦争」では最後に生々しい戦争の様子が書かれているのである。

炎の燃える下に、血の流れに浸つて壊れた砲車が転覆してゐる。軍馬が斃れてゐる。剣を上げたまま士官が仰向けになつて木の幹に半分体を支へて倒れかかる。ある者はうめいてゐる。ある者は水に渴して苦しい叫びを上げてゐる。そして、「一杯の水を恵んでくれるものがあつたら、その時はこのまま死んでもいい。」とさへ思つてゐる。ある者は、その上に掩いかかつてゐる屍を力いっぱい押し除けて、その下から這ひ出さうとしてゐる。胸を反すと横腹には、抉られた赤黒い穴があいてゐる。血が吹き出て、もう出盡くしてしまつたやうに口を開けてゐる。そこから腸が露み出てゐる。その男は妙な口附をして、顔を歪めるとばつたり前のめりに地の上に伏してしまつた。程隔たつた所には、暗い塹壕が曲線的に深く地に喰ひ入つてゐる。その中で、うごめいてゐる獣だか人間だかの黒い影がある。そこには溶岩の流れたやうに、とす黒い煙が上つて、ちぢちぢと爆る音が聞えて、真赤な火が閃めくかと思ふと消える。消えるかと思ふと閃めく。ちやうどその時、すべてを包む厚い、濃い、夜が物の上に垂れかかる。

忽ち、私は、可憐な子供等が寒さと、飢ゑと、怖れに戦いてゐる者は泣き、ある者は叫びながら幾十人が一塊りとなつて、廣い空地に右を向き、左を向き、互に誰か迎へに来てくれるだらう、いつ迎へに来てくれるだらうか？と思ひながら、やがて日の暮れるのも知らず佇ずんでゐる。この時、規律正しく、一列になつて兵卒の一隊が前方に現はれる。指揮刀が曇つた空の

下で白光りに閃めく。やがて一隊の兵卒は止る。そして「つちに向く。なにか士官が命令する。ふたたび指揮刀が閃めく。兵卒は肩の銃を執つて一斉に「つちに向つて狙ひを定める。この瞬間子供等は自分達が、今殺されるといふことを知らない。」打て！」の号令に火蓋は一斉に着切られる。急に子供等の悲鳴が聞える。小さな体で起る死の刹那の叫びが聞える。やがてそれらの声が聞えなくなる。日暮方の曇つた空の下には、罪もなくして虐殺された幾多の死骸が散乱する。その上を寒い風が吹き、それらの肉を啄まうとする群鴉の啼声がして、黒い影が無数に輪を空に画くのである。

戦争など作り話だと言つていた今までの話とは一転して、戦争の残酷性を大きく表している文章である。死体の描写も生々しく、説明だけでその情景が思い浮かぶほどである。また、無力な子供が犠牲になっており、長男の死についても書かれてあるこの作品は未明の思い入れの強いものだろう。

「野薔薇」

「野薔薇」は三人の会で読み上げられたことから脚光を浴び始め、一九二八年には左翼文芸家総連合『戦争に対する戦争』に再収録されている小川未明の代表的反戦童話と言つてもよいだろう。

【戦争表現】

・ただひとりずつの兵隊が派遣されて、国境をさだめた石碑をまもつて

・顔を知りあわないあいだは、ふたりは敵か味方かというような感じがして、ろくろくものもないません
・ほんとうの戦争だったら、どんなだかしれん
・二つの国は、なにかの利益問題から、戦争をはじめました。
・私の首を持って行けば、あなたは出世ができる。だから殺してください。

・私の敵は、他になければなりません。

・戦争はずつと北の方で開かれています。私は、そこへ行って戦います。

・戦争は、ずっと遠くでしているので、たとえ耳をすましても、空をながめても、鉄砲の音もきこえなければ、黒いけむりのかげすら見られなかった

・小さな国が負けて、その国の兵士はみなごろしになって、戦争は終つた

・一列の軍隊でありました。そして馬に乗って、それを指揮するのは、かの青年でありました。その軍隊はきわめて静粛で声一つたてません。

【考察】

主人公であろう老兵士は、最後まで戦争に関わることはなくこの物語は幕を閉じる。そのため、戦争が起きてはいるがその様子などは一切わからないままである。戦争の終結も旅人から聞いてはじめて知つていることから、老人は「戦争」でいう日本人と同じような立場であることが伺える。「野薔薇」が反戦童話と言われているのは、老兵士と青年兵の絆を戦争が引き裂いたことから戦争は悪であると

いうことを感じ取ったからではないだろうか。

第二章 未明の戦争観に影響を与えたもの

第一節 社会主義者としての未明

小説・童話作家として知られている未明だが、一方で社会主義者としての一面も持っている。文壇に出た頃の未明は芸術において外部の観察を強調する自然主義の対立である感覚や内的な観察を強調するネオ・ロマンチズムや帝政ロシアの社会主義思想であるナロードニキ思想に魅されており、未明が大正期の初頭からアナキズムに傾倒した基底となっているのは明らかである。そして未明が自然主義文学の全盛する時代においてネオ・ロマンチズムに拘ったために陥った貧困と苦悩の時期を書いた「魯鈍な猫」は彼の自伝的小説とされている（船木枳郎、一九六二）。この貧困の時代を経たことにより彼はさらにアナキズムに傾いたのである。

未明は大正九年に日本社会主義同盟の発起に文壇人として参加している。この時のことについて未明はこう述べている。

『大正にはいつてから、日本の資本主義は、急速の発展をしました。経済的にも、思想的にも、ますます国際的關係を生ずるに至りました。そして、貧富の懸隔は、甚しくなつていつた。文芸の士だけが、これに無関心であることがなくなつた。』『日本社会主義同盟』の解散後、思想運動はこれを契機として、マルキシズム、サンヂカリズム、アナキズム等に分かれるに

至りました。常に、それ等の行動により一歩遅れ勝ちであつた文芸においても、少壮の人々は、今こそ民衆の中へはいつて行くべき時だと考えました。社会主義文芸の火は上りました。そして『種蒔き』時代までは、反資本主義的文芸家の提携であつたものが『三人の会』以後、ここにも、マルキシズムとアナキズムの分裂を見たのであります。（随想「五十年短きか長きか」）

しかし、マルキストの人々と同じ陣営にいた未明だが、やがて彼等と袂を分かつことになる。なぜ、未明はそうするに至つたのであろうか、それを知るために、まずは未明の所属していたマルキシズムとアナキズムの違いを見る。まず、マルキシズムは搾取を廃止して貧富の差をなくすために階級闘争を变革の手段としてその将来の社会が何等か法的強制力を以つて維持する共同体を目指しているのに対してアナキズムは国家と強権を否定し、友愛と平等を以つて維持する共同体の社会を目指している。未明の思想が空想的理想的社会主義と言われるのもこのためである。また、人間の善性に信頼する唯心観をとるアナキズムに対し、マルキシズムの人間観は人間を経済力とみなす唯物観であつたことも理由であろう。

さらに、未明は『近代思想』に作品を紹介されたことをきっかけに大杉栄と交流を持ち始める。大杉栄の影響を受けた未明はクロポトキンを読みはじめ感銘を受ける。クロポトキンの思想に触れた未明は人道主義に目覚め、戦争そのものを否定する立場へと向かつてゆく。

未明はさまざまな立場にたつてはいるが、そのどれもが戦争反対

の意思を崩してはおらず、むしろ強まっているように思われる。

第二節 未明の戦争経験

未明は誕生してから没するまでの七十九年間で四度の戦争を経験している。日清戦争、日露戦争、第一次世界大戦、第二次世界大戦である。

日清戦争では未だ執筆を行っておらず、未明は日露戦争が起こった時代から執筆活動を開始し、処女作「漂浪児」（一九〇四）を発表する。日露戦争は一年で終結し日本はポーツマス条約に調印している。日露戦争のことを書いた「霰に霰」（一九〇五）、「日本海」（一九〇六）を発表している。

小川未明		日本
一九〇四	処女作「漂浪児」	日露戦争
一九〇五	「霰に霰」	ポーツマス講和会議
一九〇六	「日本海」	

(表6)

その後は十年間大きな戦争のない時代を過ごす。前節でも述べたとおり、未明は世間の流行との相語により生活困難に陥っている。しかし、一九一四年サラエボ事件をきっかけに第一次世界大戦が勃発する。日本は同年八月にドイツに宣戦布告し参戦。未明は「路上

の一人」を執筆、発表する。守るべきもののためならば戦うこともいとわなれど書かれたこの小説は未明の揺れる内心が見て取ることができると思われる。そして同年十二月、長男哲文を疫痢で亡くするのである。詳しいことは次節で述べることにするが、子供の死が未明に影響を与えたことは考えに難くない。一九一五年、日本は中国に対していわゆる二十一か条の要求を提示する。シベリア出兵のあった一九一八年、未明は「戦争」を発表する。作中では長男の死について触れられており、苦悩と後悔がありありと記されている。

そして前節で述べたように未明の人道主義の立場が大きく表れたのが、一九二〇年のシベリア出兵時に起きた尼港事件についての未明の発言である。尼港事件とは当時、ロシアのオホーツク海に近い都市ニコライエフスク（尼港）で起きた大規模な住民虐殺事件のことである。一九二〇年二月、日本軍と反革命軍に占領されていたニコライエフスクの街はバルチザンの部隊に完全包囲された。流血を避けようとしたバルチザンのトリアピツインは日本軍に降伏を呼びかけ、二度にわたり軍使を送るもいずれも殺害されたため、ついに市街を砲撃した。日本軍はロシアへの内政不干渉、武装解除などを条件に降伏するも協定を破り、バルチザンに襲撃をかけた。一週間の激戦の後、日本軍は壊滅的な打撃を受け民間の日本人一三六人がバルチザンに捕らわれる結果となった。やがて五月、日本軍はニコライエフスク奪還をはかるがトリアピツインは情勢不利と判断するや撤退を決断する。その時市中を焼き払い、反革命軍や収監されていた日本人を皆殺しにしたのである。

この事件は大々的に報道され、多くの人々に衝撃を与えたであろうことは想像に難くない。そして、この尼港事件について当時大

な影響力のあつた『中央公論』や『太陽』などでは、「尼港の惨劇」に関する記事を多少は載せているが「尼港事件・哀悼と公憤と問責」と題して一五五名の各界の人々の発言を収録した『日本及日本人』第七八七号では小川未明も一文を寄稿している。

あり得べからざる悲劇

考へるだに戦慄すべき事実です。指頭を切つたどにどれ程の痛さであるかを知り、兄弟や小供が病氣にかゝつた際、百万方をつくして医者の一言一句に神経を焦立させる吾人が、七百名虐殺の有様を聞いた時に、殆んどかゝることがあり得べきかと信することが出来なかつた程です。

しかし戦争といふことを——人間が人間を殺し合ふことを——兎角是認する国民には、さまで感じないかも知れない。人間を殺していふといふ思想が私には既に怖しいのです。殺すといふことに於て異なるところが無い。戦争と虐殺とは事実には同じです。戦争のある限り何処かに於て、やはり虐殺が行はれてゐる。殺すといふ思想を全く人類から取り去らない限りは、永久にこのあり得べからざる悲劇が演ぜられるであらう。

戦争の残酷性をこの短い文章に込めており、戦争そのものを否定する人道的立場からなされたこの発言は報復を求める国民の声とは一線を画している。

同年ついに、連合軍とドイツ軍との間に休戦協定が結ばれ、第一次世界大戦は終結する。未明は長女晴世も結核で同じ時期に亡くす。終戦から二年後の一九二〇年、国際連盟が成立し、日本も参加する

ことで全世界への復帰を表明。未明は「野薔薇」を発表。後に反戦童話として有名になるこの作品を書いて漸く小川未明の第一次世界大戦は日本の対戦とともに終わりを迎えることとなる。

未明は直接戦地に行き、戦つたわけではないが作品内での戦争描写は細かくまるで見てきたような表現であつた。日本は戦場になることはなかつたが、報道で耳にする戦地の状況を未明は想像力のみで書き上げたのであろう。多くの日本人が無関心に日常を過ごしていた中で未明は、経験したことのない戦争を身近に感じていたのである。

第三節 家族の死

第一次世界大戦中、未明は二児を亡くしておりその出来事が未明の執筆活動に大きな影響を与えたことは明らかである。貧困の時代、二児は栄養失調に陥る。その四年後の一九一四年、長男哲文はわずか六歳で疫病によつて死亡する。姉が猩紅熱などで入院し、妻が家にいなくなつた時に二人きりで過ごした思い出のある長男の死は未明に衝撃を与え、執筆活動が遅くなる。何をやる気力のなくなつた未明は、一日中書齋に閉じこもり子供のことばかりを考えていた。この時の未明の様子が未明本人の日記に書かれている。

未だに新年の雑誌すら一冊も読んでみません。子供を失ひましてから、急に死に対する考へも違つて来ました。(中略)

一月四日

午前、妻は小林病院へ行き、死んだ哲文の着て行つた着物と

羽織と帽子を受取つて帰る。これを見て泣く。(中略)

一月五日

風は身を切るやうに寒い。しかし空は青く晴れてゐた。二十日に当るので妻と共に西岸寺の哲文の墓に詣つ。途中、近所の子供等がこの寒風に吹かれながら遊んでゐるのを見て羨み、また亡児にことを思ふ。

「哲文は直に風ひく、あの兒は弱かつた。」と妻が他の子供等を見ながら言つた。(中略)

一月二日

亡兒の三七日に当るので、妻と共に墓に詣つた。墓は寺にあつて、西に向いてゐる。卒塔婆に午後の日がほがらかに當つてゐる。西方浄土といふ感じがした。二十一日前まで、まだこの世に生きてゐた子供の面影を描くと、柔和な、しかし孤独な子供の立つてゐる姿がありありと見えて、覺えず涙ぐまれた。「夢であるといふんだが。」と妻が独言のやうに言つた。——哲文はもう帰つて来ない。(後略)(「最近の日記」)

長男を失い、執筆の筆が止まつた未明であつたが、自らの肩に一家の生活がかかっていることを思うと、住まいを移動して心機一転の気持ちで奮闘しなければならないと思うようになった。しかし、仏法では四十九日之間、靈魂がその家の屋根を離れないと、家さがしをたびたび躊躇つていたようである。しかし、実際未明は転居を實行しており、翌年一九一五年に牛込区矢来町三八番地へと移つてゐる。

この出来事によつて未明の死生観は大きく変化したと言われている。

る。そして、長男の死によつて子供の死について敏感になつた未明は更に長女に過保護になつていった。靴下を猛暑の日でも履かせ、家に病原を持ち込まないように尽くしたにも関わらず、長女は机を並べていた隣の子の結核に感染してしまつたのである。「やせた、やせたじゃないか、ええ、おいつ」と行水をしていた長女の背骨が浮き出た背中を見て妻に叫んだ未明の声は今になつても次女である岡江鈴江氏には忘れられないのである。(一九七〇)そして、長女晴世は看護の甲斐なく一九一八年、十二歳でこの世を去つたのである。生活貧困の時代をともしに過ごした二児を失つた悲しみは骨まで達し、未明ははなはだしく鞭打たれたのである。この痛手は晩年になつても大きく、亡くなつた一人の話になれば未明も妻も目に涙を浮かべ、切なそうにうつぶいさうである。

それから未明は結核という病氣に対して非常に恐怖心をいだき、敏感になつたようであり青白い顔をした人を見ればまずは結核ではないかと疑うようになった。未明と結核のエピソードでこんな話がある。ある日、未明は妻の友人の女性に「結核ではないか」と顔を見るなり言つた。未明の言葉が氣になつた女性は半ば健康診断のもりで病院を受診すると初期の結核であることが判明したという話である。

家族の死、とりわけ子供の死は未明の死生観の変化をさらに確実なものへと変えていつたのではないだろうか。悲しみが未明に与えた影響は無視できるものではなかった。長男の死で、大きなショックを受けたであろう未明は残された家族のため、一度は持ち直そうと奮起した。しかしながら四年後に長女も亡くし、相次ぐ子供の死は未明だけではなく小川一家にも暗い影を落としたであろう。

第三章 未明の戦争観の特徴

第一節 戦争の起きた場所

小川未明の書く戦争小説・童話での戦争が起きた場所は次のとおりである。(表7)

「霧に美」	太平洋	「日本海」	日露戦争
「石火」		「魯鈍な猫」	
「路上の一人」		「戦争」	遠い所・海のか なた
「負傷者」		「酒倉」	甲国・乙国
「野薔薇」	北の国	「無産階級者」	日露戦争
「強い大将の話」	ある国	「虚を狙ふ」	

(表7)

北の国、遠い国などの主人公とは関係のないところで戦争が起きていることが多い。実際の戦争を取り扱っている作品でも戦の舞台は日本国内ではない。

ではなぜこのように未明は主人公と身近ではない場所で戦争を起したのであろうか。二つの意見を提示したい。

一つ目についてであるが、「戦争に対する感想」(一九一八)の中
で未明はこう述べている。

海の彼方で、日と同じうして幾百人の人間が互に殺し合ひ、血を流しつゝある事実に対して、其のことを知りながら、皆なあまり驚き騒がぬことが、何より私にとつては奇異な感を抱かせる。仕方がないことだと思つてゐるのか、其れとも、他人同志の喧嘩だとも思つてゐるのか。

多くの日本人が戦争が起きてはいるが普段と変わらない生活をおくっていることが記されている。また「戦争」(一九一八)でも未明の分身である主人公の私は周囲の人が普段と変わらない生活を送っているのだから戦争は真実ではないと言っている。つまり、読者側である日本人が戦争というものを身近に扱っていないのである。戦争に対する認識は薄く、あまつさえ戦争を利用して金儲けをしようとする輩には未明も軽蔑のまなざしを向けている。いくら戦争について書いてあつても受け手に理解されなければ意味がないのである。そのために未明は戦争を遠い場所に置いたのではないだろうか。

二つ目は、戦争をあえて遠いところに行ふことによつて、現実味を消そうとしたのではないだろうか。この現実味のない戦争を「伝聞」と表現したい。第一次世界大戦中の日本の様子を書いた「戦争」では戦争の様子は新聞のみで知らされるだけの「伝聞」というかたちで戦いは行われており、最後のシーンでは生々しい戦争の様子が書かれてはいるがそれは決して現実のものではなく、戦争が身近なものではないことを強調している。また、反戦童話として有名な「野薔薇」では戦争の起きている北の国と平和な南の国という対比が書かれていると共に、主人公である老人は一切戦争に参加せず、さら

に戦争の結果を旅人から聞くという完全なる“伝聞”の戦争となっている。

このように、わたしのいる場所とは違うどこか遠い場所”での戦争は“戦争”を希薄化させることが中心になって書かれているのである。

第二節 死人の扱い

戦争が起きているわけであるから、作品では死人の登場が多く見られる。そして彼らは死体での登場よりも幽霊などの実態を持たない姿での登場をするのである。

この幽霊はどんな意味を以って登場しているのだろうか。この死人や幽霊は戦争で亡くなった人である。このことから、これらは遠くで戦争があったことを伝える役目を持ったのだろうかと推測できる。

弾丸に当たって死んだと名乗る幽霊が登場する「戦争」は死者と生者の対比がはっきりと分けられている。その幽霊は戦争が本当にあるのか疑問に思っている私にささやきかけるのである。幽霊の姿は私には見え、当然声も私にのみ聞こえるだけである。幽霊は私に『戦争』といふものは、作り話を真実に「したものだ」と言い、息子の死に悲しむ私に対して「一人の死なんて、なんでもないぢやないか？」と嘲笑する。反論する私に「今度の戦争」で「何も知らない子供を弾丸の桶にして」いると冷やかな声で告げるのである。

この幽霊という存在は本物の“幽霊”というよりは主人公である私の心ではないだろうか。誰にも見えず、声も聞こえないというのはその理由があるからではないだろうか。ならば、作品の前半部分の

問答は真実、自問自答の形であり、私は心の中では作り話の戦争で人が死に、子供が犠牲になるがそれは、自らの子ではないから安堵していたのではないだろうか。そして、後半部分では現実存在するFとの対話を主軸にすることによって自問自答をやめさせ現実の問答で私は意見をまとめてゆくことになる。Fとの会話の後に幽霊が登場していないことがこの真実を暗に示しているのではないだろうか。つまり「戦争」での死人の幽霊はもう一人の私であったということである。幽霊という架空の存在を消すことで、私は自分の存在を確立させたのである。

老兵士が夢うつつで青年の姿をみた「野薔薇」では「戦争」とはうってかわって死人である青年は対話をしない。何も告げることはなくただ薔薇のにおいをかぐだけである。なぜ、青年は老兵士に対して行動をしなかったのであろうか。まず、第一に青年と老兵士は敵国同士に属しているが敵国同士ではなかったのである。老兵士は戦争が始まったと聞いた時、青年に自分を殺して首を持って行き、出世してほしいと言っている。これは敵国同士では出来ることではない。友人に近い関係だった二人であるから青年はこれを断り、北に向かい戦死してしまうのである。青年はいくら敵国同士であっても老兵士を踏み台にしてまでのし上がる気はなかった。むしろ、友人を亡くすくらいならば自らの死を選んだのではないだろうか。ならば、青年に未練などなく、老兵士に感謝の念を伝え、自らの姿を見せた後は深く消えて行ったのではないか。「野薔薇」の幽霊は真実、霊魂の形であるだろう。

死人と言っても種類は様々であり、未明の戦争小説・童話で描かれている死人はまず肉体的な死人と霊魂的な死人とに分けられる。

そして霊魂的な死人はさらに、存在する幽霊と思想上の幽霊の二つに分類できるだろう。真実、幽霊である死人はとくに何も告げないのに対し、空想である幽霊はそれを認めている者の心であることが多い。その幽霊の存在は作品に登場人物の思考の整理をさせることに役立つのではないだろうか。

第三節 「野薔薇」は真実、反戦童話であるのか

先行研究の佐々木守氏「痛い、痛い、痛いばらのとげ」にこのような文章がある。

Kさん、未明の「野ばら」をどう思いますか。ぼくはこれを読んで、まず、「未明という人は、いわゆるヒューマニストだな」と思いました。次に「この童話はとても厭戦気分の強い作品だな」と思いました。三番目にぼくは「これはまあ何とノンビリしたお話なのだろう」と考えました。最後にぼくは「これはとても美しい話だな」と感じたのです。

佐々木氏はこの論文で「野薔薇」は厭戦であると述べているのである。厭戦とは戦争を嫌うことの意味で、反戦とは戦争に反対することである。厭戦と反戦の何が違うかといえば、厭戦はまかり間違ふと好戦へと転じる可能性を持っているのである。戦争は嫌だ」という漠然とした思いだけでは強制力は一つもなく、戦争反対へと人々の心を動かすことは出来ない」と佐々木氏は述べている。

しかし、厭戦が反戦に転じることもあるのではないだろうか。戦

争はいやだ、戦争はしたくない”その思いが厭戦思想を反戦思想に転換することもありえるはずである。「野薔薇」で戦争によって老兵士と青年兵が死別したことは、人々を“戦争はしたくない”から、“戦争はすべきではない”という思想に変えることは不可能ではない。「野薔薇」からは、好戦に転じる要素は感じられないのである。そのため、「野薔薇」は反戦童話であると考える。

おわりに(終章)

小川未明の長い生涯の中で、第一次世界大戦期というものは、一つの転換期であったように思われる。主にこの時代は、未明の小説家としての活動期であった。作品発表初期は「霞に雲」、「日本海」といった戦争に肯定的な作品を見ることができ、未明が日露戦争までは好戦的であったことは明らかであろう。その戦争観に最初に変化を見ることが出来るようになったのは一九一二年あたりからである。「魯鈍な猫」で兵士を機械のようにたとえ、世間の人間さえも冷たいものとみなしたその作品は未明の貧困と苦悩の時代を反映させており、自らに救いを差し伸べなかつた世間や周囲の人間を拒絶しているように思われる。次の変化は大杉栄との交流と、クロポトキンとの出会いである。一九一三年のクロポトキンの思想との出会いは未明に大きな変化をもたらした。人道主義によつて戦争反対の意見を持ち始めた未明の揺れ動く思想は「路上の一人」で見取ることが出来るであろう。戦争反対の立場ではあるが大切なものを守るためには戦わなければならないという、矛盾した考えの狭間で苦悩する未明がこの作品にはあらわれている。そして最後の決定打を与

えたのが子供の死である。とりわけ一九一四年の長男の死は未明の死生観をゆるがす大事件であった。この未明の生涯でも暗い影を落とし続けたであろう事件は未明の戦争観を反戦意識へと決定させたのである。

そして、未明の戦争小説・童話では戦争について書かれているはずであるのにどこか現実味がない話ばかりである。それは、未明は戦争を直接現地で起こすのではなく、関係のないところで起こすことで描写の制限や戦争の希薄化をしているからではないだろうか。

小川未明は戦争反対の意見を持ちながらも戦争小説・童話を書いたのは第一に、その内容が反戦であること。そして戦争が残酷であることを知らせ、読者にも思いを共有してほしかったのであろう。反戦思想であったからこそ、未明の戦争小説・童話は戦争の内容が直接でないため希薄になっており、しかし、残酷性を知らせるためにあえて戦争に忌避感を抱くような表現をしたのだと考えられる。

参考文献・資料一覧

テキスト

小川未明『定本小川未明童話全集』（大空社、二〇〇一・六）

小川未明『定本小川未明小説全集』（講談社、一九七九）

資料

大和田茂『社会文学・一九二〇年前後』（不二出版、一九九二）

岡上鈴江『父小川未明』（新評論、一九七〇）

小川未明「あり得べからざる悲劇」『日本及日本人』政教社、一九二〇）

小埜裕二編『解説 小川未明小説1』（永田印刷、二〇一四）

小埜裕二編『解説 小川未明童話45』（北越出版、二〇一二）

佐々木守「痛い、痛い、痛いばらのとげ——小川未明「野はら」について——」『日本児童文学』日本児童文学者協会、一九八〇）

船木枳郎「小川未明の思想と新興文学」『近代文学』近代文学社、一九六一）

一 (一八八五—一九二三) 思想家、作家、ジャーナリスト、社会運動家。明治大正における日本の代表的なアナキスト。

二 ピョートル・アレクセイヴィチ・クロボトキン (Пётр Алексеевич Кробо́ткин) (一八四二—一九二二) ロシアの革命家、政治思想家、地理学者、探学者、生物学者。近代アナキズムの発展に尽くし、無政府共産主義を唱えた。

三 第一次世界大戦中、日本が中華民国政府と行った外交交渉における二十一か条の要求と希望。